謠曲と日本精神

教學局編纂

日本精神叢書　十二

1490
12
60

Y994
J5024

Y994
J5024

I 種
W
1200800160211

謠曲と日本精神

佐成謙太郎

一、本叢書は、主として我國古來の典籍中より精神教育上適切なるものを選擇してその要點を解說し、廣く國民をして日本精神の心解と體得とに資せしむることを以て目的とするものである。

一、本篇は、女子學習院教授佐成謙太郎氏に委囑し、執筆を煩したものである。

昭和十四年三月

教學局

目次

一、謠曲と日本精神……一
二、謠曲の國家思想……一七
三、謠曲の神國思想……二五
四、謠曲の尊皇思想……三五
五、謠曲の自然愛……四〇
六、謠曲の平和思想……四八
七、謠曲の純愛思想……五八
八、謠曲の孝悌思想……六五
九、謠曲の主從思想……七四
十、謠曲の藝術思想……八〇
十一、謠曲の宗教思想……八七

謠曲と日本精神

一　謠曲と日本精神

わが日本精神は、わが國土から生まれ出る、すべてのものゝ中に存在してゐる筈であるが、その最も著しいものを、謠曲のすべての詞章から見出し得るやうに思ふのである。まづその理由から述べて行きたいと思ふ。

第一に、謠曲はわが國内で自然に育成せられて來た、最初の完備した演劇、能樂の詞章である、人々の思想・感情、ひきくるめて精神といふものは、何よりも文學・藝術の上に著しく現はれるものであるが、同じく文學・藝術といつても、外國の文藝を模倣したものや、外國の文藝に刺激せられて成立したものは、兎角その内容が歪められて、本來の精神を失ひ易い。自國固有の文藝には、

さうした恐れは少いが、しかし、個人的の鑑賞を旨とする純文藝には、その作者の個性・特性がよく表現せられてゐるにしても、必ずしもその時代の全般的な精神を代表してゐるとはいひ得ないものがあるが、多衆的な民衆的な、民謡とか戯曲とかいふものには、善かれ悪しかれ、その時代の全般的な國民精神を遺憾なく表現するものである。そして、謡曲、いひ換へれば、その主體である能樂は、平安朝時代に於ける、極めて卑近な民間演藝の猿樂から源を發して、民衆を哄笑せしめる輕口・滑稽掛合程度の喜劇、開口猿樂・答辯猿樂などといふものに發達し、それが平安末期から鎌倉時代にかけて流行した今様・白拍子などの民謡・舞踊と併演せられ、それらが聯絡結合しては、連事・風流の如きものとなり、その間に猿樂の主流が喜劇的方面と歌劇的方面とに分派しながら、互に切磋しつゝ次第に藝術的展開を進めて、遂に室町初期、喜劇を旨とした狂言と、歌劇を旨とした能樂やがて謡曲と、二種の戯曲に大成したのである。尤も或人は謡曲がかうした戯曲に到達する間に於て、支那の元曲の影響を受けたものでなからうかと臆説を立てゝゐるが、事實に於てさうした形跡は認められない。わが國内に於て極めて自然に滑かに次第に發展して來た經路が十分に確かめられるのである。從つて謡曲はわが日本精神を、少くとも室町時代に於ける日本精神を表現してゐることが否まれないのである。

第二に、謡曲は古來のわが文藝・傳説を集大成したものである。謡曲の内容は、まことに種々様々であつて、靈驗説話もあれば文藝説話もあり、武人傳説もあれば世話巷説も乃至異類説話の如きものもある。そしてそれら説話の材料には、わが國最古の記錄、古事記・日本書紀乃至萬葉集を初めとして、同じ時代の曾我物語・義經記乃至幸若舞曲等に至るまで、すべての文藝記錄に亙つてゐるのである。例へば、古事記・日本書紀から採つたものには、「大蛇」「玉井」「三輪」「吳服」などがあり、萬葉集から得たものに「三山」「船橋」な

ど、古今集に據つたものに「高砂」「志賀」「草子洗小町」「松虫」「女郎花」などがあり、物語類では、伊勢物語から材をとつたものに「雲林院」「杜若」「井筒」「小鹽」「右近」など、源氏物語に據つたものに「夕顔」「半蔀」「葵上」「野宮」「住吉詣」「須磨源氏」「玉葛」「浮舟」などがあり、軍記物では、平治物語から出た「朝長」、平家物語諸本に據つた「鵺」「頼政」「木曾」「兼平」「巴」「七騎落」「箙」「藤戸」「正尊」「八島」「祇王」「佛原」「俊寛」「熊野」「小督」「實盛」「經政」「俊成忠度」「忠度」「敦盛」「知章」「通盛」「清經」「碇潜」「千手」「盛久」「大原御幸」などがあり、曾我物語から出たものに「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」「禪師曾我」など、義經記に據つたものに「橋辨慶」「船辨慶」「吉野靜」「忠信」「攝待」などがある。なほ又、傳説文藝類を見れば、今昔物語に據つたものに「道成寺」「絃上」「善界」など、宇治拾遺物語から出たものに「國栖」、古今著聞集又は十訓抄から出たものに「春日龍神」「養老」「大會」など、撰集抄に據つたものに「雨月」「江口」など、袖中抄に據つたものに「木賊」「錦木」「野守」などがある。更にまた、神社の緣起神事から出たと思はれるものに「賀茂」「松尾」「放生川」「和布刈」「繪馬」「大社」など、佛寺の緣起から出たと思はれるものに「誓願寺」「當麻」「道明寺」などがある。

かくして、謡曲はわが文藝傳説を總括したものであり、從つてわが日本精神を總括したものであるといひ得るのである。

第三に、謡曲にはその作者の指導精神が著しく高調せられてゐる。謡曲が如何にわが古來の文藝傳説を總括したものであらうとも、その素材の取扱方に何等新しい解釋がなく、その脚色に何等清新な滋味がなければ、わが文藝傳説史上に於ける謡曲の價値は、格別いひ立てるほどのものはない。或は又、謡曲がいかに民衆的な戯曲であらうとも、たゞその時代の民衆に迎合するばかりで、作者自身に高い見識がなく、時代を向上せしめる指導精神が見えないならば、

わが日本精神史上に於ける謡曲の價値は、まことに小さなものであるといはなければならない。然しながら事實は、謡曲作者、わけても謡曲の大成者世阿彌は、わが國古今を通じて他に類例を求め難いほどの、高い見識を持ち、強い信念をもつて、謡曲を創作したのであつた。委しくは次項以下に細説することゝして、こゝにその一二例を擧げれば、

一、從來の勝れた説話に對しては、更に一段深く立ち入つて、その内容を鮮明にしてゐる。例へば、「鷺」は平家物語卷五「朝敵ぞろへの事」に、

延喜の帝、神泉苑に行幸なつて、池の汀に鷺のゐたりけるを、六位を召して、「あの鷺取つて參れ」と仰せられければ、如何が捕らるべきとは思へども、綸言なれば歩み向ふ。鷺羽づくろひて立たんとす。「宣旨ぞ」と仰すれば、平んで飛び去らず。卽ちこれを捕つて參らせたりければ、「汝が宣旨に從ひて參りたるこそ神妙なれ、やがて五位になせ」とて、鷺を五位にぞなされける。「今日より後、鷺の中の王たるべし」といふ御札を親ら遊ばいて、首につけてぞ放たせ給ふ。全く是は鷺の御料にあらず、只王威の程を知し召されんが爲なり。

とあるのに據つたもので、これは謡曲作者の尊皇思想と一致するものであるが、謡曲では更に原據より一層鮮かに描き出して、

ワキヅレ(大臣)「いかに藏人。あの洲崎の鷺をりから面白う思し召され候間、取りて參らせよとの宣旨にて候。

ワキ(藏人)「宣旨畏つて承り候さりながら、かれは鳥類飛行の翅、いかがはせんと休らへば、

ワキヅレ「よしやいづくも普天の下、率土のうちは王地ぞと、

ワキ「思ふ心を便りにて、

ワキヅレ「次第次第に、

ワキ「芦間の蔭に、

地「狙ひより狙ひよりて、岩間の蔭より取らんとすれば、この鷺驚き羽風立てて、ばつとあがれば力なく、手を空しうして、仰ぎつつ走り行きて、汝よ聞け勅諚ぞや、勅諚ぞと呼ばはりかくれば、この鷺たち歸つて、もとの方に飛び下り、羽を垂れ地に伏せば、抱きとり叡覽に入れ、げに忝き王威の惠み、ありがたや賴もしやと、皆人感じけり。げにや佛法王法の、かしこき時の例とて、飛ぶ鳥までも地に落ちて、叡慮に叶ふありがたや。

地「猶々君の御惠み、仰ぐ心もいやましに、御酒を勸めて諸人の、舞樂を奏し面々に、さぎの藏人召し出だされて、樣々の御感のあまり爵を賜び、ともになさるる五位の鷺、さも嬉しげに立ち舞ふや。

シテ（鷺）「洲崎の鷺の羽を垂れて、

地「松も磯馴るる氣色かな。〔舞〕

シテ「畏き惠みは君道の、

地「畏き惠みは君道の、四海に翔る翅まで、靡かぬ方もなかりければ、まして鳥類畜類も、王威の恩德のがれぬ身ぞとて、勅に從ふこの鷺は、神妙神妙放せや放せと、重ねて宣旨を下されければ、げに忝き宣命を含めて、放せばこの鷺、心嬉しく飛びあがり、心嬉しく飛びあがりて、行方も知らずぞなりにける。

といつてゐるのである。

二、舊來の說話に不滿足の場合には、新しい解釋を下してゐる。そしてその解釋は、常に人心を感動せしめるに足る、誠に尊敬すべきものである。例へば「藤戶」は、平家物語卷十「藤戶の事」に據つたもので、佐々木盛綱は、浦の男から海の淺瀨を敎へられたものゝ、その男がまた他の武士に淺瀨を敎へて、これに功を奪はれることを惧れ、慘酷にもこの若者を殺して、難なく先陣の功

を立てたのであるが、平家にはその奇智を賞して、

昔より馬にて河を渡す兵多しと雖も、馬にて海を渡すこと、天竺震旦は知らず、わが朝には希代のためしなりとて、備前の兒島を佐々木にたぶ。鎌倉殿の御教書にも載せられたり。

といつてゐるだけで、盛綱の爲に犠牲となつた若者に對して、何等同情の筆を執つてゐないのであるが、この曲の作者世阿彌は、かうした、人を欺き人を陷れる武士の習はしに同感することが出來ない。世阿彌は平家の武功説話を素材としながらも、これを背景として、この武功の爲に犠牲となつた一賤夫の悲運、わが一子にとり殘された母老婆の悲歎を主想としたゐるのである。卽ちかの武功の恩賞に賜はつた備前國兒島に初入部してワキ盛綱をして、いかにも仁慈の領主らしく「皆々訴訟あらんずる者は罷り出でよと申し候へ」と言はしめて置いて、さてシテの老婆を登場せしめ、

海士の刈る藻にすむ蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をばげに、何か恨みんもとよりも、因果の廻る小車の、やたけの人の罪科は、皆報いぞといひながら、わが子ながらも餘りげに、科も例も波の底に、沈め給ひし御情なさ、申すにつけて便なけれども、御前に參りて候なり。

と訴へしめる。仁君であつた筈の盛綱は、

何とわが子を波に沈めし恨みとは更に心得ず。

と、そらとぼける。老婆が聲を勵ましてなうわが子を波に沈め給ひし事に候。

と詰ると、盛綱は、

ああ音高し何と何と。

と、思はず彼の陋劣卑怯な心事を暴露する。そして老婆に、

なう猶も人は知らじとなう。なかなかにその有樣をあらはして、跡をも弔

らひ又は世に、生き殘りたる母が身をも、訪ひ慰めてたび給はば、少しは恨みも晴るべきに、いつまでとてか信夫山、忍ぶかひなき世の人の、扱ひ草も繁きものを、何と隱し給ふらん。住み果てぬこの世は假の宿なるを、親子とて何やらん、幻に生まれ來て、別るれば悲しみの、思ひは世々をひく、絆となつて苦しみの、海に沈め給ひしを、せめては訪はせ給へや、跡弔らはせ給へや。

と、情理を盡くして責め立てられた末、終に、

言語道斷、かかる不便なる事こそ候はね。今は何をか包むべき。その時の有樣語つて聞かせ候べし。

と、一切を懺悔して、亡き若者の追善と老婆の扶助とを實行するといふやうに脚色してゐるのである。

三、舊來の說話に不滿足の場合、これに或程度の變更を加へてゐる。そしてこゝの變更は、作者の高潔な精神から企てられたもので、從つてその作品は、舊來のものに比べて、遙かに高雅なものに導かれてゐる。例へば「羽衣」の傳說は、近江風土記(帝王編年紀所引)、丹後風土記(萬葉鈔所引)、駿河風土記(神社考所引)等に見えてゐる著名な傳說であるが、それらすべての傳說では、その地の土民が羽衣を奪つて返さない爲に、天女は已むを得ず一度地上の人となり、土民と契りを結び、その間に幾人かの子をさへ儲けるのであるが、この曲の作者世阿彌は、これらの傳說から離れて、もつと淸純な構想を立てゝゐる。卽ち、この羽衣を手に入れたワキ漁夫白龍は、初め、

われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる處に、虛空に花降り音樂聞え、靈香四方に薰ず。これただごとと思はぬ處に、これなる松に美しき衣懸れり。寄りて見れば色香妙にして常の衣にあらず。いかさま取りて歸り古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

といつてゐるが、シテ天人から「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず」と聞かされるや、早くも利己的な慾望を棄てゝ、

そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。

と、貴重な財物に就ては、これを國家本位に考へる。そして天人が、

天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひて行方知らずも。住み馴れし空にいつしか歸り行く雲の、羨ましきけしきかな。迦陵頻伽の馴れ馴れし、聲今更に僅かなる、雁がねの歸り行く、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ波、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

と、わが故郷の天空を仰いで悲歎にくれると、あはれを感じた白龍は、

いかに申し候、御姿は見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。

と、一度は國の寶ともなさうとしたこの羽衣を、心易く天人に返し與へる。それで、天人は地上に留まる憂へもなく、まして土民の契りを結ぶやうな汚事もなく、かの羽衣を身に着けて、「霓裳羽衣の曲をなし」、「御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し」、「天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の霞にまぎれて」立ち去ると脚色してゐる。その構想の、いかにも高潔清純であること、これに上越するものはあるまいと思ふのである。

四、謠曲の取材・脚色等すべて、至純熱烈なる尊皇愛國の精神から湧き出たものであつて、苟も時の權勢に阿り、その意を迎へるといふことをしてゐない。否、毅然たる態度を以てこれに對立してゐるのである。例へば「弓八幡」は、男山八幡宮が「君を守りの御惠み、もとより定めある上に、殊にこの君の神德、天下一統と守るなり」と誓ひ結ふ、めでたい曲であるが、この祝言を受けるワ

キを「後宇多の院に仕へ奉る臣下」としてゐるのである。後宇多院は申すまでもなく　後醍醐天皇の御父帝にわたらせ給ふのである。世は足利時代である。しかもこの作者世阿彌は足利義滿の殊寵を受けてゐたものである。しかもこの曲は、世阿彌の申樂談儀によれば、足利義教將軍宣下の時に作られたものと推定せられるのである。然るに、世阿彌は足利幕府の爲にこの曲を作つてゐない。たゞにこの曲ばかりではなく、他のどの曲にも、幕府を謳歌したものは、一曲も片言隻句もないのである。どの神事物に於ても、わが皇室を祝福し奉つてゐるのであるが、わけてもこの曲に於ては、足利氏が最も慚愧し奉らなければならない南朝大覺寺派の後宇多院を祝福し奉つてゐるのである。足利氏の勢威の最も盛んな時代に於て、しかもその保護下にありながら、何の臆する所もなく、何の憚る所もなく、彼の信念、彼の祈願をそのまゝ吐露した。その情熱、その膽力、これに比肩し得る人が、今の世に於ても、果して幾人あるであらうか。

彼は七十餘の衰老をもつて、終に義教の爲に佐渡の遠島に處せられたのであるが、彼はこれを悔いなかつた。彼ばかりではない、爾後の謠曲作者も亦齊しく彼の精神を繼承して、幾多の新曲を創作して行つたのである。

凡そ以上のやうな理由によつて、わが日本精神の最も著しいものを、謠曲のすべての詞章から見出し得ると信ずるのである。

二　謠曲の國家思想

わが國民の國家觀念は夙く神話創成時代から嚴存してゐた。わが國の神話ほど國家意識の强烈な、國家本位に語られてゐるものは、他に全くその類例を見ない。しかしながら、その後、外來文化の吸取に餘りに專念であつた爲に、甚しく外來文化を崇拜するやうになつたばかりでなく、一面、わが國には久しく外敵來寇の憂へがなく、國内靜穩であつた爲に、國家對立の意識が刺激せられ

ず、自然、國家觀念が潜在するやうになつて來た。その間にあつて、强い國家意識に燃え立ち、正しい主張をなしたのが謠曲である。卽ち第一に、謠曲作者は外來文化の價値を認めると共に、既にそれがわが國に攝取せられた上は、その糟粕を外國に求める必要がないと說いた。第二に、わが國固有のものに、外來のものと同種類のものがある場合には、わが國のものが他のものに比べて一段と勝れてゐると主張した。第三に、苟もわが國に對して侮りをなすものに對しては、敢然としてこれと戰ひ、これを追放すべきことを宣言したのである。その第一例として、世阿彌作の「春日龍神」を擧げれば、ワキ栂の尾の明慧法師が入唐渡天を志して、春日明神に御暇乞に參詣すると、シテ宮守が出て來て、

入唐渡天といつぱ、佛法流布の名をとめし、古蹟を尋ねんためぞかし。天台山を拜むべくは、比叡山に參るべし。五臺山の望みあらば、吉野筑波を拜すべし。昔は靈鷲山、今は衆生を度せんとて、大明神と示現し、この山に宮居し給へば、卽ち鷲の御山とも、春日のお山を拜むべし。われを知れ、釋迦牟尼佛世に出でて、さやけき月の世を照らすとはとの、御神詠もあらたなり。然れば誓ひある、慈悲萬行の神德の、迷ひを照らす故なれや。小機の衆生の益なきを、悲しみ給ふ御姿、瓔珞細輭の衣を脫ぎ、麁弊の散衣を著しつつ、四諦の御法を說き給ひし、鹿野苑もこゝなれや、春日野に起き臥すは、鹿の苑ならずや。

と、釋迦入滅後の今日では我國こそ佛法興隆の地であると敎へ、軈て龍神が現はれて、法華會座の樣は固より、摩耶の誕生から雙林の入滅に至る迄悉くこれを眼のあたりに示して、

地「明慧上人、さて入唐は、

ワキ「とまるべし。

地「渡天はいかに、

ワキ「渡るまじ。

地「さて佛蹟は、

ワキ「尋ねまじや。

と、堅く誓約させてゐるのである。

第二例として、同じ人の作「白樂天」を擧げれば、支那文物の渡來以降、漢詩・漢文の尊重せられたのは異常のもので、著名な支那文人といへば、誰彼の差別なく尊敬せられたが、中にも、殊に唐詩人白樂天の崇敬せられたことは、われ等の想像以外のものであつたが、この曲のワキに、

抑もこれは唐の太子の賓客、白樂天とはわが事なり。さてもこれより東に當つて國あり、名を日本と名づく。急ぎかの土に渡り、日本の智慧を計れ

との宣旨に任せ、唯今海路に赴き候。

といつて登場すると、松浦沖にシテ漁翁が現はれ出る。そこで、

ワキ「いかに漁翁、さてこの頃日本には何事を翫ぶぞ。

シテ「さて唐土には何事を翫び給ひ候ぞ。

ワキ「唐には詩を作つて遊ぶよ。

シテ「日本には歌を詠みて人の心を慰め候。

ワキ「そも歌とは如何に。

シテ「それ天竺の靈文を唐土の詩賦とし、唐土の詩賦を以てわが朝の歌とす。されば三國を和らげ來るを以て、大きに和らぐと書いて大和歌とよめり。知ろしめされて候へども翁が心を御覽ぜんため候な。

ワキ「いやその義にてはなし。いでさらば目前の景色を詩に作つて聞かせう。青苔衣をおびて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰を圍る。心得たるか漁翁。

シテ「青苔とは青き苔の、巖の肩にかゝれるが、衣に似たるとかや。白雲

帶に似て山の腰を圍る。面白し面白し、日本の歌も唯これ候よ。苔衣着たる巖はさもなくて、衣着ぬ山の帶をするかな。

ワキの詞が傲慢であるのに比べて、シテの詞は甚だ謙遜であるが、論爭に於ては一歩も讓らない。唐の詩に對して、直に和歌を以てこれに對抗するのである。白樂天は驚いて、

ワキ「不思議やな、その身は賤しき漁翁なるが、かく心ある詠歌を連ぬる、その身は如何なる人やらん。

シテ「人がましやな名もなき者なり。されども歌を詠むことは、人間のみに限るべからず、生きとし生けるもの毎に、歌を詠まぬはなきものを。

ワキ「そもや生きとし生けるものとは、さては鳥類畜類までも、

シテ「和歌を詠ずるその例、

ワキ「和國に於て、

シテ「證歌多し。

地「花に鳴く鶯、水に住める蛙まで、唐土は知らず日本には、歌を詠み候ぞ。翁も大和歌をばかたの如く詠むなり。

と、鶯が歌を詠んだ證歌などを擧げて說き聞かせる。白樂天は愈〻驚いて、

げにや和國の風俗の、心ありける海士人の、げにありがたき習ひかな。

と驚歎する。かくして、白樂天をうち敗かすのであるが、既にして和歌が唐土の詩賦に勝つてゐることを明かにした上は、また他の一面に、勝者の堂々たる襟度を示して、

とても和國の翫び、和歌を詠じて舞歌の曲、その色々を現さん。

といつて、海青樂を舞ひ遊び、その小忌衣の手風神風によつて唐船を吹き戻すと脚色してゐるのである。

第三例として「善界」を擧げれば、シテ大唐の天狗の首領善界坊は、

さてもわが國（支那）に於て、育王山青龍寺、般若臺に至るまで、少しも慢心の輩をば、皆わが道に誘引せずといふ事なし。まことや日本は、粟散邊地の小國なれども神國として、佛法今に盛んなる由承り及び候間、急ぎ日本に渡り、佛法をも妨げばやと存じ候。

といつて渡來し、まづわが國に於ける外道、愛宕山の太郎坊を語らつて、比叡山を窺ふのであるが、山僧が祈願を籠めると、

明王諸天はさて置きぬ、東風吹く風に東を見れば、山王權現、南に男山、西に松の尾北野や賀茂の、山風神風吹き拂へば、さしもに飛行の翅も地に落ち、力も槻弓の、八洲の波の、立ち去ると見えしが又飛び來り、さるにても、かほど妙なる佛力神力、今より後は來るまじと、いふ聲ばかりは虛空に殘り、いふ聲ばかりは虛空に殘つて、姿は雲路に入りにけり。

と、難なく敗退すると描いてゐるのである。

三　謠曲の神國思想

前に擧げた「善界」に、シテ善界坊が「日本は粟散邊地の小國なれども神國として」といひ、これに語らはれたツレ太郎坊も「それわが國は天地開闢よりこの方、まづ以つて神國なり」といつてゐる。このやうに、謠曲作者は憎むべき外敵・異端者にさへ、日本は神國であると言はせてゐるのであるから、まして他の普通曲、殊に神事物に於ては、常にわが國の神國であることを高唱してゐる。勿論、この神國思想は謠曲によつて初めて唱へ出されたものではない。古事記・日本書紀等に明記せられた、天地開闢以來の嚴肅な事實である。一二の文獻を擧げれば、神功紀に「東に神國あり、日本と謂ふ」と記し、平家物語卷二「敎訓の事」にも「それ日本は神國なり」といひ、神皇正統記も「大日本は神國なり」といふ言葉から筆を起してゐる。しかし、神國思想の最も充滿し

てゐるものとしては、まづ謠曲を擧げなければなるまい。

謠曲の神國思想は、第一に、わが日本は神の生み給うた國土である、從つてこの國土にあるすべてのものが神物であるといふ考へから出發してゐる。「大社」に

いづくにか、神の宿らぬ影ならん、嶺も尾上も松杉も、山河海村野田、殘る方なく神のます、御影を受けて隔てなき、宮人多き往來かな。

この考へ方は、わが國の根本精神であつて、嚴として動かすべからざるものである。「逆矛」にも、

抑も大日本國といつぱ神國たり。……昔伊弉諾伊弉冊の尊、この御矛を携へて、天の浮橋を踏み渡り給ひ、則ち御矛をさしおろし、則ち御矛をさしおろし給ひ、青海原をかき分けかき分け探り給へば、矛のしたたり凝り固まつて、國となれり。まづ淡路島、紀の國伊勢志摩、筑紫四國、總じて八つの國となつて大八洲の國と名づけ、天地人の三才となる事もこの矛の德なり。あらありがたや。

と語り、「淡路」にも、同じ諸冊二神がわが國土を御創造遊ばされた御事を述べて、

日神月神蛭子素盞嗚尊と申すは、地神五代の始めにて皆この島に御出現、中にも皇孫は、日向の國に天降り給ひて、地神第四の火火出見の皇子を御出生、げにありがたき代々とかや。天下を保ち給ふ事、すべて八十三萬六千八百餘歲なり。かかるめでたき皇子達に、御代を讓葉の權現と、現れおはします、伊弉諾伊弉冊の神代も、唯今の國土なるべし。

といひ、「御裳濯」にも、

五十鈴川、清き流れの深みどり、影も百枝の松風の、をさまる木々の色までも、神の惠みの御影ぞと、所からなる心地して、ながめ妙なる氣色かな。

などと讃へて、謡曲の隨所にこの精神を説いてゐるのである。

第二に、日本は神國で、これを統治し給ふ代々の天皇は神孫に渡らせ給ふのであるから、八百萬の神は代々の帝を守護し給ふと信ずるのである。「鵜祭」に「御影曇らで君守る、神の宮居に參らん」といひ、「代主」に「われ劫初よりこの山に住んで、王城を守り御代を崇め、天下泰平の寶の山、葛城の神と現れて」といひ、「右近」に「眞はわれはこの神（北野）の末社と現れ、君が代を守りの神と思ふべし」といひ、更にまた、

天皇の畏き御代を守るなる、右近の馬場の春を得て、花上苑に明らかにして、輕軒九陌の塵に交はる神心、和光の影も曇りなき、君の威光も影高く、花も搖がず治まる風も、のどかなる代のめでたさよ。

といひ、「金札」にも、惡魔を降伏して皇室の御安泰を守護し給ふ樣を描いて、

シテ「守るべし、わが國なればすめらぎの、萬代いつと限らまし。

地「限らじな限らじな、榮ゆる御代を守りのしるし、

シテ「ただ重くせよ神と君、

地「重くすべしや重くすべしや、扉も金の御札の神體、光もあらたに見え給ふ。

地「四海を治めし御姿、四海を治めし御姿、

シテ「あらたに見よや君守る、

地「八百萬代のしるしなれや、

シテ「惡魔降伏の眞如の槻弓、

地「さて又つぎには狹蠅なす、

シテ「あらぶる神も祓へのひもろぎ、

地「その神託は數々に、左も右も神力の、惡魔を射拂ひ淸めをなすも、金胎兩部の、〔舞働〕

シテ「とても治まる國なれば、
地「とても治まる國なれば、なかなかなれや君は船、臣は瑞穗の國も豐かに治まる代なれば、東夷西戎南蕃北狄の恐れなければ、弓をはづし劒を納め、君もすなほに民を守りの、御札は宮に納まり給へば、影さしおろす玉簾、影さしおろす玉簾の、ゆるがぬ御代とぞなりにける。

などといつてゐるのである。

第三に、神々の守護し給ふ代々の帝は神孫に渡らせられ、卽ち現人神であらせ給ふのであるから、神と君とに何等の御隔てがない、神君御一體に渡らせ給ふと說いてゐる。「大社」に「神と君との隔てなき世」といひ、「岩船」に「こは所も住吉の、神と君とは隔てなき、誓ひぞ深き」又「あをきが原の波間より、あらはれ出でし住吉の、神も守りの道すぐに、ここに御幸を住吉の、神と君とは行合の、まのあたりあらたなる、君の光ぞめでたき」といひ、「御裳濯」に、

ありがたや、神の世繼は久方の、天の村早稻種とりて、今人の代に至るまで、四の時日は曇りなくて、千代萬代の末かけて、國土豐かに民あつき、惠みの國も幾久し。殊更に、ここは曇らぬ神路山、內外の末も影淸き、御裳濯川の末うけて、流す田面の早苗取る、田子の裳裾の色までも、國土豐かに樂しむなり。種を蒔き、種を收めし神代より、草も木も、わが大君の國なれば、いづくも同じ神と君、隔てなき世に住まふ身の、誰か惠みの外ならん。げにや八洲の海までも、波靜かにて吹く風の、枝を鳴らさぬ天地の、神の威德はありがたや。

といつてゐるなどが、その例である。

第四に、神々は大君を守護し給ひ、大君は萬民を愛撫し給ひ、そして大君と神とが御一體にわたらせ給ふから、われ等國民は常に神と君との御愛護によつ

て安泰に繁榮して行くと感激するのである。「高砂」「弓八幡」「采女」などに「神と君との道すぐに」といひ、「白髭」に「君と神との道すぐに」といひ、「右近」に「君と神との御惠み」といひ、「飛鳥川」に「神と君が代の廣き御影」といひ、「白樂天」に「神と君が代の動かぬ」といつて、それ〴〵實證を述べてゐるが、更に他の例を求めれば、「賀茂」に、

ツレ（天女）「あらありがたの折からやな、われこの宮居に地を占めて、法界無縁の衆生をだに、一子とおぼし見そなはす、御祖の神德仰ぐべしやな。曇らぬ御代を守るなり。

地「守るべし守るべしやな、君の惠みも今この時、

ツレ「時至るなり時至る、

地「感應あれば影向微妙の、相好莊嚴まのあたりにありがたや。〔天女舞〕

地上歌「賀茂の山竝御手洗の影、賀茂の山竝御手洗の影、映り映ろふ緣の袖を、水に浸して凉みとる、凉みとる、裳裾を濕す折からに、山河草木動搖して、まのあたりなる別雷の、神體來現し給へり。

シテ（別雷神）「われはこれ、王域を守る君臣の道、別雷の神なり。

地「或は諸天善神となつて虛空に飛行し、

シテ「又は國土を垂跡の方便、

地「和光同塵結緣の姿、あらありがたの御事やな。〔舞働〕

シテ「風雨隨時の御空の雲居、

地「風雨隨時の御空の雲居、

シテ「別雷の雲霧を穿ち、

地「光稻妻の稻葉の露にも、

シテ「宿る程だに鳴る雷の、

地「雨を起して降りくる足音は、

シテ「ほろほろ、

地「ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす、鳴神の鼓の時も至れば、五穀成就も國土を守護し、治まる時にはこの神德と、威光を顯しおはしまして、御祖の神は糺の森に、飛び去り飛び去り入らせ給へば、猶立ち添ふや雲霧を、別雷の、神も天路に攀ぢ昇り、神も天路に攀ぢ昇つて、虛空に上らせ給ひけり。

又、「放生川」に、

そもそも當社と申すは、欽明天皇の昔より、一百歲の代々を經て、この山に移りおはします。然るに宗廟の神として、御代を守り國家を助け、文武二つの道廣く、九重續く八幡山、神にも御名は八つの文字。それ諸佛出世の本來空、眞性不生の道を示し、八正道を顯し、人佛不二の御心にて、正道の頭に宿り給ふ。人の國よりわが國、他の人よりもわが人と、誓はせ給ふ御惠み、げにありがたや、われ等如きのあさましき、迷ひを照らし給はんの、その御誓願まのあたり、行教和尙の御法の袖に影映る、花の都を守らんと、南の山に澄む月の、光も三つの衣手に映り給へり。さればにや宗廟の、跡明らかに君が代の、直なる道を顯し、國富み民の竈まで、賑はふ鄙の貢船、四海の波も靜かなり。利益諸衆生の御誓ひ、二世安樂の、神德は猶榮ゆくや、男山にし松立てる、梢も草も吹く風は、皆實相の響にて、峯の山神樂、その外里神樂、懺悔の心夢覺め、夜聲もいとど神さびて、月かげろふの石淸水の、淺からぬ誓ひかな、げに淺からぬ誓ひかな。

と說いてゐる。かくして、君と神と人と、その間に少しの間隙をも許さないのが、わが神國思想である。

四　謠曲の尊皇思想

既に國家意識に燃え立ち、神國思想に充滿して居れば、熱誠溢るゝ尊皇思想の湧き出るのは、寧ろ當然のことであらう。謡曲作者は第一項に述べたやうに、足利將軍治下にありながら、その手厚い保護を受けながら、正義の前には如何なる權勢にも屈しなかつたのである。否、幕府專横の實情を眼のあたりに眺め、皇室式微の御有様を痛歎し奉つたが故に、その尊皇精神は一層油を注いで燃え上つたのである。謡曲の先進文藝である宴曲（えんきよく）には當時の幕府所在地鎌倉を中心とした作があり、多少とも幕府を謳歌した作があるが、謡曲には一言半句と雖も、幕府の爲に辯じたものがない。能樂を五種類に分つた第一の脇能、神事物はすべて、わが大君の御仁政をたゝへ奉り、わが皇室の彌榮をことほぎ奉つたものばかりである。例へば、

四海波靜かにて、國も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひに相生の、松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、ことも愚かやかかる世に、住める民とて豐かなる、君の惠みぞありがたき。……「高砂」

それ天長く地久しくして、神代の風のどかに傳はり、すめらぎの畏き御代の道廣く、國を惠み民を撫でて、四方に治まる八洲の波、靜かに照らす日の本の、影豐かなる時とかや。春日野に、若菜摘みつつ萬代を、祝ふなる、心ぞしるき曇りなき。天つ日嗣の御調物（みつぎもの）、運ぶ巷や都路の、直なる御代を仰がんと、關の戸ささで千里まで、遍く照らす日影かな……。「難波」

松陰に、千代をうつせる緑かな。さもいさぎよき山の井の水、山の井の、水滔々として波悠々たり。治まる御代の君は船、君は船臣は水、水よく船を浮かめ浮かめて、臣よく君を仰ぐ御代とて、幾久しさも盡きせじや盡きせじ。君に引かるる玉水の、上澄む時は、下も濁らぬ瀧つの水の、浮き立つ波の、返す返すもよき御代なれや。萬歳の道に歸りなん。……「養老」

さす枝の、梢は若木の花の袖、これは老木の神松の、千代に八千代にさざ

れ石の、巖となりて苔のむすまで。苔のむすまで松竹鶴龜の、齡を授くるこの君の、行末護れとわが神託の、告を知らする松風も梅も、久しき春こそめでたけれ。……「老松」

神事物ばかりではない、三番目物の「草子洗小町」などにも、

霞立つ、霞立てば遠山になる朝ぼらけ。日影に見ゆる松は千代まで。四海の波も四方の國々も、民の戸ざしもささぬ御代こそ、堯舜の嘉例なれ。大和歌の起りは、あらかねの土にして、素盞嗚尊の、守り給へる神國なれば、花の都の春ものどかに、和歌の道こそめでたけれ。

と、神事物と同樣の祝言を述べてゐる。かくして、わが國民は、草も木もすべてわが大君の國であり、普天の下率土の濱すべて王臣であるといふ、强い信念の上に立つのであつて、例へば、「羅生門」に、平井保昌が座談のついでに、

この頃不思議なる事を申し候。九條の羅生門に鬼神の住んで、暮るれば人の通らぬ由を申し候。

といへば、同座の渡邊綱が、

いかに保昌、筋なき事な宣ひそ。さすがに羅生門は、都の南門ならずや。土も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼の宿と定めんと聞く時は、たとひ鬼神の住めばとて住ますべきにあらず。かかる粗忽なる事を仰せ候ぞ。

と批難して居り、「大江山」や「土蜘蛛」では、「土も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼の宿りなるらん」と呼ばはつて、王威を輕んずる鬼神を滅し、「田村」も同じ信念をもつて鬼神を滅して居り、また「國栖」では、藏王權現が「普天の下率土のうちに、王威をいかで輕んぜん」と叫んで、大勢力を出して、天皇を守護し奉り、「雷電」では、法性坊律師が「率土四海の内は王土にあらずといふ事なし」と說いて、雷神を鎭めてゐるのである。

五　謠曲の自然愛

春夏秋冬、うつり行く自然の景趣を親愛し賞美するのは、わが國民の秀れた一つの特性である。夙く記紀にもそれが著しく現れてゐる。萬葉集にも、その第一に置かれた雜歌の多くが四季の歌であるばかりでなく、また別に四季雜歌といふ部類をも立てゝゐる。古今集以後の歌集は、必ず四季の歌を第一に置き、且それが歌集の大半を占めてゐる。枕草子その他の隨筆類もこれを重視してゐる。物語小説類も景趣の描寫には特に力を注いでゐる。かうした傳統を繼承して來た謠曲に、自然讃美の曲の多いことはいふまでもないが、謠曲の作意として特に目立つのは、この自然讃美が常に神威・君德と結びつけられてゐることである。わが國は神國である、わが國土にあるすべてのものが神物である。そしてこの神國・神物は神孫の知ろしめす所である。であるから、すべての自然が美しい、樂しい。この美しい樂しい自然を、われ等が享受し得るのは、神威の賜であり、君德の御惠みであると、かういつてゐるのである。例へば、「佐保山」に、

それ天地開闢の昔より、山海草木に至るまで、萬物悉く成佛して、皆靈驗の神所たり。とりわき四季を司ること、まづ春を守る神といつぱ、この山姫の神德として、草木森羅萬象まで、御影の綠充ち滿てり。然れば所の名にし負ふ、佐保の山河の惠み深く、千秋萬德の春を得て、佐保山姫と顯れ給ふ。誰が爲の、錦なればか秋霧の、佐保の山邊をたち隱すらんと、ながめけるもこの山の、妙なる秋の景色なり。かやうに治まれる四つの時、いく年々を送りけん。花の春、紅葉の秋の夕時雨、古きを守るためしまでも、仰ぐや靑丹(あをに)よし、奈良の世々ぞ久しき。殊更この山は、春の日影もよそならで、慈悲萬行の神德の、弘き誓ひの海山も、皆安全の國とかや。抑も葦原

の國つ神、世々に普き誓ひにも、御名は殊に久方の、天の兒屋根のその昔、この秋津洲の主として、皇孫をいつき給ひしより、八洲に治まる時つ風、四海に立たむ波の聲、萬歳をよばふ三笠山、御影もさすか河竹の、佐保の山邊の春の色、萬山ものどかなりけり。

かうした春の曲には、「嵐山」に、

それゑんまん十里の外なれば、花見の御幸なきままに、名を負ふ吉野の山櫻、千本の花の種とりて、この嵐山に植ゑ置かれ、後の世までの例とかや。これとても君の惠みかな。げに賴もしや御影山、治まる御代の春の空、さも妙なれや九重の、内外に道ふ花車、轅も西に廻る日の、影行く雲の嵐山、戸無瀨に落つる白波も、散るかと見ゆる花の瀧、盛り久しき氣色かな。

同じく「右近」に、

春風桃李花の開くる時、人の心も花やかに、あくがれ出づる都の空、げにのどかなる時とかや。見渡せば、柳櫻をこきまぜて、錦を飾る花車、來る春毎に誘はるる、心も永き景色かな。花見車の八重一重、見えて櫻の色々に、ひをりせし、右近の馬場の木の間より、影も匂ふや朝日寺の、春の光も天滿てる、神の御幸の跡古りて、松も木高き梅が枝の、立枝も見えて紅の、初花車廻る日の、轅や北に續くらん。

秋を歌つた曲には、「龍田」に、

抑も瀧祭の御神とは、卽ち當社の御事なり。昔天祖の詔、末明らかなる御國とかや。然れば當國寶山に至り、天地治まる御代のためし、民安全に豐かなるも、偏に當社の御故なり。梢の秋の四方の色、千秋の御影目前たり。年毎にもみぢ葉流る龍田川、湊や秋の泊りなる。山も動ぜず、海邊も波靜かにて、樂しみのみの秋の色、名こそ龍田の山風も靜かなりけり。然れば代々の歌人も、心を染めてもみぢ葉の、龍田の山の朝霞、春は紅葉に

あらねども、唯紅色にめで給へば、今朝よりは龍田の櫻色ぞ濃き、夕日や花の時雨なるらんと、詠みしも紅に、心を染めし詠歌なり。神南備の御室の岸やくづるらん、龍田の川の、水は濁るとも和光の影は明らけき、眞如の月はなほ照るや、龍田川紅葉亂れし跡なれや、古は錦のみ、今は氷の下紅葉、あら美しや色々の、紅葉襲の薄氷、渡らば紅葉も氷も、重ねて中絶ゆべしや、いかで今は渡らん。

これらの外に、自然の景趣をありのまゝに詠んだものも少くない。

所は海の上、國は近江の江に近き、山々の春なれや。花はさながら白雪の、降るか殘るか時知らぬ、山は都の富士なれや、なほさえかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとても、沖漕ぐ舟はよも盡きじ。旅の習ひの思はずも、雲居の外に見し人も、同じ舟に馴衣、浦を隔てて行く程に、竹生島も見えたりや。綠樹影沈んで、魚木に上る氣色あり、月海上に浮かんでは、兎も波を走るか、面白の島のけしきや。……「竹生島」

誰かいひし春の色、げにのどかなる東山、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を列ねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負ふ春のけしきかな。……「熊野」

時雨せぬ夜も時雨する、木の葉の雨の音づれに、老の涙もいと深き、心を染めて色々の、木の葉衣の袖の上、露をも宿す月影に、重ねて落つるもみぢ葉の、色にも交る塵ひぢの、積る木の葉をかき集め、雨の名殘と思はん。

……「雨月」

あら面白の折からやな。明けば又、秋の半ばも過ぎぬべし、今宵の月の惜しきのみかは。さなきだに、秋待ちかねて類ひなき、名を望月の見しだにも、覺えぬほどに隈もなき、姨捨山の秋の月、あまりに堪へぬ心とや、昔とだにも思はぬぞや。……「姨捨」

自然愛から一歩進んで、山河草木鳥類蟲類までを神格化し人格化したものも少くない。これは、山河草木すべてが神物であるといふわが國固有の考へ方と、草木國土悉皆成佛といふ佛教の考へ方とによつて、極めて容易に且自然に説明せられ得るのであるが、わけても、わが國固有の秀れた文藝、和歌の力が添ふ時は、無心の草木も鋭敏に感應するのである。例へば「西行櫻」では、西行法師の詠歌に感じて、櫻の精が老翁の姿となつて現れ出で、

ありがたや、上人の御値遇に引かれて、惠みの露あまねく、花檻前に笑んで聲未だ聞かず、鳥林下に鳴いて涙盡きがたし。それ朝に落花を踏んで相伴つて出づ、夕には飛鳥に隨つて一時に歸る。九重に咲けども花の八重櫻、幾代の春を重ぬらん。然るに花の名高きは、まづ初花を急ぐなる、近衞殿の絲櫻。見渡せば、柳櫻をこきまぜて、都は春の錦燦爛たり。千本の櫻を植ゑ置きその色を、所の名に見する、千本の花盛り、雲路や雪に殘るらん。

毘沙門堂の花盛り、四王天の榮花もこれにはいかでまさるべき、上なる黒谷、下河原、昔遍昭僧正の、浮世を厭ひし華頂山、鷲の御山の花の色、枯れにし鶴の林まで、思ひ知られてあはれなり、清水寺の地主の花、松吹く風の音羽山、ここはまた嵐山、戸無瀬に落つる瀧つ波までも、花は大井河、井堰に雪やかかるらん。

といつて舞を舞つて居り、また「藤」では、萬葉集に詠まれた、越中國多祜の浦の藤の精が美しい女性の姿をして現れ、

げにや春を送るに、舟車を動かす事を用ゐず、ただ殘鶯と落花とに別る。紫藤の露のもとに殘る花の色、げに面白や水の面に、月の霞める春もはや、紫匂ふ花鬘、かかる致景はまた世にも、奈古の浦わも程近く、眺めにつづく景色かな。なつかしき、色のゆかりと思ふにも、心にかかる藤波の、夜晝わかで徒らに、送り迎ふる年月の、春の花散りて青葉に、夏橘の匂ふに

ぞ、見ぬ世の人も忍ばるれ。桐の葉落ちて秋來ぬと、しるくも月の影澄む
や、浦吹く風に小夜更けて、曉と白波、立ち騷ぐ群千鳥、友呼ぶ聲や霜雪
に、冬の氣色の知らるらん。かやうに移ろふ四つの時、理なれや夏かけて、
盛り久しき藤波の、花に立ち添ふ朝霞、暮れ行く春のかたみぞと、惜しむ
心も紫の、深く頼みを松が枝に、かかる契りぞたのもしき。

といつて、同じく舞を舞つてゐるのである。

六　謡曲の平和思想

自然を愛する國民に、好戰の邪念のあらう筈はない。わが國民は古來平和を旨として來たのであるが、しかし、平和を確保する爲には、外敵を防ぐ爲の武備を必要とする。從つて、その任に當る武士は常に戰鬪を覺悟してゐなければならない。平和を愛するが故に、他の一面、武を尙ぶのは當然のことである。

然し、武士の社會的地位があまりに向上して、武士相互がその第一位を競爭して、武力を以てこれを爭奪しようとするやうになれば、尙武はやがて邪道に陷つて、好戰となり易い。能樂の觀衆、謡曲の聽衆は、武士階級の而かもその重立つた人々であつたから、謡曲作者はこゝに最も意を用ゐた。能樂の二番目物修羅物は武士を主人公としたものであり、四番目物現在物にも武士を主人公としたものが多いのであるが、武士の戰勝を主題としたものは殆どない。大部分の修羅物は、その名の示す通り、敗軍の將が戰歿した後、修羅道に陷つて惱む苦患の樣を描いてゐるのである。例へば「生田敦盛」では、敦盛の遺子が賀茂明神に參詣して、「夢になりとも父の姿を見せて給はり候へ」と祈願をこめると、一七日の滿參に、明神がその心情を憐んで閻魔王に仰せつけ、父子の對面を與へられるのであるが、その喜びも束の間、

シテ「あれに見えたるは如何なるものぞ。なに閻王よりの使とや。片時の

暇とありつるに、今までの遲參心得ずと、閻王怒らせ給ふと、

地「いふかと見れば不思議やな、いふかと見れば不思議やな、黑雲俄かに立ち來り、猛火を放ち劍を降らして、その數知らざる修羅の敵、天地を響かし充ち滿ちたり。

シテ「ものものし明暮に、

地「馴れつる修羅の敵ぞかしと、太刀眞向にさしかざし、ここやかしこに走り廻り、火花を散らして戰ひしが、暫くありて黑雲も、次第に立ち去り修羅の敵も忽ちに消え失せて、月澄み渡りて明々たる、曉の空とぞなりにける。

シテ「恥かしや子ながらも、

地「かく苦しみを見る事よ、急ぎ歸りて亡き跡を、懇に弔ひてたび給へと、泣く泣く袂を引き別れ、立ち去る姿はかげろふの、小野の淺茅の露霜と、形は消えて失せにけり。

と、みぢめな結末を告げるのである。この例に漏れるものは、僅か「八島」「籠」「田村」の三曲だけで、特にこれを勝修羅物（かちしゆらもの）と呼んでるるのであるが、名は勝修羅物といつても、「八島」「籠」の二曲は、たゞ敗軍の樣を描かないといふだけで、戰勝を主題としてるるのではない。その亡靈は「なほ妄執の瞋恚とて、鬼神魂魄の境界に歸り、われとこの身を苦しめて、修羅の巷に寄り來る波の、淺からざりし業因かな」（八島）と歎き、「山里海川も皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや」（籠）と悲しんでるるのである。かくして、數多い二番目物のうち、戰勝を主題として、修羅の苦患を描いてるないのは、ただ「田村」の一曲があるだけである。これは朝敵を討滅する大義の戰であるから、源平の如き、權勢慾から出た私鬪とは、全くその趣を異にしてるるからである。卽ち、東國の僧が都に上つて、田村丸の建立した淸水寺に詣で、夜もすがら法華經を

讀誦してゐると、田村丸がありし世の甲冑姿で現れ出で、

あらありがたの御經やな。清水寺の瀧つ波、まこと一河の流れを汲んで、他生の緣ある旅人に、言葉をかはす夜聲の讀誦、これぞ即ち大慈大悲の、觀音擁護の結緣たり。

といふ。しかしそれとは知らぬ僧が、

不思議やな花の光にかかやきて、男體の人の見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。

と尋ねると。

今は何をか包むべき、人皇五十一代、平城天皇の御宇にありし、坂上の田村丸。東夷を平らげ惡魔を鎭め、天下泰平の忠勤たりしも、即ち當時の佛力なり。然るに君の宣旨には、勢州鈴鹿の惡魔を鎭め、都鄙安全になすべしとの、仰せによつて軍兵をととのへ、既に赴く時節に至りて、この觀音の佛前に參り、祈念を致し立願せしに、不思議の瑞驗あらたなれば、歡喜微笑の賴みを含んで、急ぎ凶徒に打ち立ちけり。普天の下率土の中、いづく王地にあらざるや。やがて名にし負ふ、關の戸ささで逢坂の、山を越ゆれば浦波の、粟津の森やかげろふの、石山寺を伏し拜み、これも清水の一佛と、賴みはあひに近江路や、勢田の長橋踏み鳴らし、駒も足並や勇むらん。既に伊勢路の山近く、弓馬の道もさきかけんと、勝つ色見せたる梅が枝の、花も紅葉も色めきて、猛き心はあらかねの、土も木もわが大君の神國に、もとより觀音の御誓ひ、佛力といひ神力も、なほ數々に大丈夫が、待つとは知らでさを鹿の、鈴鹿の禊せし世々までも、思へば佳例なるべし。さる程に、山河を動かす鬼神の聲、天に響き地に滿ちて、滿目青山動搖せり。いかに鬼神も確かに聞け、昔もさる例あり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も、王意に背く天罰にて、千方を捨つれば忽ち亡び失せしぞかし。ま

してや間近き鈴鹿山。ふりさけ見れば伊勢の海、安濃の松原むら立ち來つて、鬼神は黑雲鐵火を降らしつつ、數千騎に身を變じて、山の如くに見えたる處に、あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の光を放つて虛空に飛行し、千の御手毎に、大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霰と降りかかつて、鬼神の上に亂れ落つれば、悉く矢先にかかつて、鬼神は殘らず討たれにけり、ありがたしありがたしや、誠に呪咀諸毒藥、念彼觀音の力を合はせて、卽ち還着於本人の、敵は亡びにけり。これ觀音の佛力なり。

と戰勝の樣を語つて立ち去るのであるが、しかもその主眼は、前に述べた尊皇思想の現れとして、王威の爲には神力佛力の加護の厚い感激にあるのである。かうした謡曲の平和思想を平明に說いてゐるのが「弓八幡」である。

ワキ「今日は當社の御神事とて、參詣の人々多き中に、これなる翁錦の袋に入れて持ちたるは弓と見えたり。そもいづくより參詣の人ぞ。

シテ「これは當社に年久しく仕へ申し、君安全と祈り申す者なり。又これに持ちたるは桑の弓なり、身に及びなければ未だ奏聞申さず。唯今御參詣を待ち得申し、君へ捧げ物にて候。

ワキ「ありがたしありがたし。まづまづめでたき題目なり。さてその弓を奏せよとは、私に思ひ寄りけるか、もし又當社の御託宣か、わきて謂れを申すべし。

シテ「これは御言葉ともおぼえぬものかな。今日御參詣を待ち得申し、桑の弓を捧げ申すこと、卽ちこれこそ神慮なれ。

ツレ「その上聞けば千早ぶる、

シテ
ツレ「神の御代には桑の弓、蓬の矢にて世を治めしも、直なる御代のためしなれ。よくよく奏し給へとよ。

ワキ「げにげにこれは泰平の、御代のしるしは顯れたり。まづその弓を取り出だし、神前にて拜み申さばや。

シテ「いやいや弓を取り出だしては、何の御用のあるべきぞ。

ツレ「昔唐土周の代を、治めし國のためしには、

シテ「弓箭をつつみ干戈を戢めし例を以て、

ツレ「弓を袋に入れ、

シテ「劍を箱に納むるこそ、

ツレ「泰平の御代のしるしなれ。

シテ
ツレ「それは周の代これは本朝、名にも扶桑の國を引けば、

地上歌「桑の弓、取るや蓬の八幡山、誓ひの海も豐かにて、君は船、臣は瑞穗の國々も、殘りなく靡く草木の、惠みも色もあらたなる、御神託ぞめでたき、神託ぞめでたかりける。

この考へ方は、謠曲の隨所に出てゐて、第三項に擧げた「金札」にも「弓をはづし劍を納め」といつて居り、「放下僧」には「引かぬ弓放さぬ矢にて射る時は、當らずしかも外れざりけり」といつてゐる。弓箭刀劍は人を殺戮する兇器ではなく、國土平安萬民繁榮の守りとなるべきものである。「逆矛」に、

伊弉諾伊弉冊は、天祖の御教へ、直なる道をあらためんと、天の浮橋に、二神佇み給ひて、この御矛を海中に、さしおろし給ひしより、御矛をあらためて、天の逆矛と名づけそめ、國富み民を治め得て、二神の始めより今の代までの寶なり。その後國土治まりて、御代平らかになりしかば、瀧祭の明神この御矛を預かりて、所も普しや、この御山に納めて、寶の山と號すなり。抑も御矛の主たりし、名もいさぎよき瀧祭の、神の社はいづくぞと問へば名を得し龍田山、紅葉の八葉も、卽ち矛の刄先より、照らす日影や紅の、光さしおろす矛の露、天地すなほなる事も、こここそ寶身は知ら

ず、國の寶の山高み、よくよく禮し給へや。

といひ、「小鍛冶」にも、

それ漢王三尺の劍、居ながら秦の亂れを治め、又煬帝がけいの劍、周室の光を奪へり。その後玄宗皇帝の鍾馗大臣も、劍の德に魂魄は、君邊に仕へ奉り、魍魎鬼神に至るまで、劍の刄の光に恐れて、その寇(あだ)をなす事を得ず、漢家本朝に於て、劍の威德申すに及ばぬ奇特とかや。

と語つて、日本武尊と草薙の御劍の御事を述べ、「その後四海治まりて、人家戸ざしを忘れしも、その草薙の故とかや」といひ、さてこの度打ち奉つた御劍を勅使に捧げて、「天下第一の二つ銘の御劍にて、四海を治め給はば、五穀成就もこの時なれや」といつてゐるのである。

七　謠曲の純愛思想

文藝作家としての謠曲作者に對し、特に尊敬の念に堪へないのは、その愛情觀である。愛は人生生活の中軸をなすものであり、樣々の對象愛の中でも、男女の戀愛は最も熾烈なものであるから、東西古今を通じて、文藝の大部分が戀愛を主題としてゐるのである。しかし一歩退いて考へれば、戀愛は決して淸純なものでない。對象の異性を專有しようとする利己的なもので、且何等かの新しい刺激を受ければ、忽ちにして醒めてしまふ恐れのある、一時的な發作的なもので、必ずしも恒久性を持つてゐない。謠曲作者は他の一般文藝作家に反して、かゝる不純な戀愛を極力擯斥し、戀愛に陷つたものは、歿後地獄の苦患を受けると戒めてゐるのである。例へば、源氏物語の女性「玉葛」にしても、謠曲作者は、

げに妄執の雲霧の、迷ひもよしや憂かりける、人を初瀨の山嵐、はげしく落ちて露も涙も、ちりぢりに秋の葉の、身も朽ち果てね恨めしや。恨みは

人をも世をも、思ひ思はじ唯身一つの、報いの罪や數々の、憂き名に立ちしも懺悔の有樣、或は湧き返り、岩もる水の思ひに咽び、或は焦がるるや、身より出づる玉と見るまで包めども、螢に亂れつる、影もよしなや、恥かしや。

と叫ばしめて居り、更に強く描いては、「女郎花」に、

邪婬の惡鬼は身を責めて、その念力の、道もさかしき劔の山の、上に戀しき人は見えたり嬉しやとて、行きのぼれば、劔は身を通し磐石は骨を碎く、こはそもいかに恐ろしや、劔の枝の撓むまで、如何なる罪のなれるはてぞや、よしなかりける花の一時を、くねるも夢ぞ女郎花、露の臺や花の緣に、浮かめてたび給へ、罪を浮かめてたび給へ。

といひ、「求塚」の如きは、地獄苦惱の樣を敍することが餘りに凄慘で、むしろ過酷な感をさへ起させる程である。勿論、謠曲作者と雖も、健全な夫婦愛をも批難してゐるのではない。十分にこれを祝福してゐるのである。「高砂」に、

ワキ「不思議や見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔てて住むと、いふは如何なる事やらん。

ツレ「うたての仰せ候ぞや、山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣ひの、殊背の道は遠からず、

シテ「まづ案じても御覽ぜよ、

ツレ「高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろともにこの年まで、相生の夫婦となるものを、

といひ、「芦刈」にも、貧苦のために一時別住した夫婦の再會を描いて、

浮寢忘るる難波江の、芦の若葉を越ゆる白波、月も殘り花も盛りに津の國の、こやの住居の冬ごもり、今は春べと都の空に、伴ひ行くや大伴の、御

津の浦わの見つつを契りに、歸る事こそ嬉しけれ。

と結んでゐるのである。

しかし、謡曲作者が至純至聖、恒久不變の愛情として讃歎してゐるのは、母性愛である。その愛の深さに於て、强さに於て、戀愛と變りがなく、しかも沒我的犧牲的で、終始變りのないのが、親子の恩愛、特に母性の愛である。謡曲の一部類に狂女物といふのがある。その殆どすべてが、わが子を愛慕する母親の可憐な姿を描いたものである。「三井寺」に於ける千滿の母は、

雪ならば幾度袖を拂はまし、花の吹雪と詠じけん、志賀の山越うち過ぎて、眺めの末は湖の、鴬照る比叡の山高み、上見ぬ鷲のお山とやらんを、今目の前に拜む事よ。あらありがたの御事や。かやうに心あり顔なれども、われは物に狂ふよなう。いやわれながら理なり。あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし。ましてや人の親として、いとほしかなしと育てつる、子の行方をも白絲の、亂れ心や狂ふらん。都の秋を捨てて行かば、月見ぬ里に住みや習へると、さこそ人の笑はめ。よし花も紅葉も、月も雪も古里に、わが子のあるならば、田舍も住みよかるべし。

と歎き、「隅田川」に於ける梅若の母は、

昔にかへる業平も、ありやなしやと言問ひしも、都の人を思ひ妻、わらはも東に思ひ子の行方を問ふは同じ心の、妻をしのび、子を尋ぬるも、思ひは同じ戀路なれば、われも又、いざ言問はん都鳥、わが思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども問へども答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。

と訴へてゐるのである。狂女物は、いとしいわが子の行方を失うて、心も狂亂する弱い女性であるが、積極的に、わが子の幸福を祈つて、一命を投げ棄てる、强い母性愛を描いたものもある。「海士」に、

その時海士人申すやう、もしこの珠（唐土から渡來の途中、讃岐國志度浦の沖で、龍宮に奪はれた面向不背の珠）を取り得たらば、この御子を世つぎになしたまへと申ししかば、子細あらじと領承し給ふ。さてはわが子ゆゑに捨てん命、露程も惜しからじと、千尋の繩を腰につけ、もしこの珠を取り得たらば、この繩を動かすべし、その時人々力を添へ、引き上げ給へと約束し、一つの利劍を抜き持つて、かの海底に飛び入れば、空は一つに雲の波、煙の波を凌ぎつつ、海漫々と分け入りて、直下と見れども底もなく、邊も知らぬ海底に、そも神變はいざ知らず、取り得ん事は不定なり。かくて龍宮に到りて宮中を見れば、その高さ三十丈の玉塔に、かの珠を籠め置き、香花を供へ守護神は、八龍竝み居たり。その外惡魚鰐の口、逃れ難しやわが命、さすが恩愛の、古里の方ぞ戀しき。あの波のあなたにぞ、わが子はあるらん、父大臣もおはすらん。さるにてもこのままに、別れ果てなん悲しさよと、涙ぐみて立ちしが、又思ひきりて手を合はせ、南無や志度寺の觀音薩埵の力を合はせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮の中に飛び入れば、左右へばつとぞ退いたりける。その隙に寶珠を盜み取つて、逃げんとすれば守護神追つかく。かねてたくみし事なれば、持ちたる劍を取り直し、乳の下をかき切り珠を押しこめ、劍を捨ててぞ伏したりける。

かくして寶珠を奪ひ返したので、この海士母の腹から生まれた子房前が、父藤原不比等の跡を受けて、大臣になつたといつてゐるのである。

八　謠曲の孝悌思想

強い母性愛に感激する者は、これに對して孝養報恩につとめる。「海士」に、前掲の物語を聞いた房前が、

みづから大臣の御子と生まれ、惠み開けし藤の門、されども心にかゝる事

は、この身殘りて母知らず。ある時傍臣語りて曰く、忝くも御母は、讃州志度の浦、房前のあまり申せば恐れありとて言葉を殘す。さては賤しき海士の子、賤の女の腹に宿りけるぞや。よしそれとても帚木に、暫し宿るも月の光、雨露の恩にあらずやと、思へば尋ね來りたり。あらなつかしの海士人や。

と涙を流して、懇に母海士の追善をしたとあるのは、當然のことである。

しかし、子の父母に對する情は、もと〳〵報恩といふやうな功利的な考へから出たものではない。父母の子に對する愛が沒我的犧牲的であるやうに、子の父母に對する孝も亦、沒我的犧牲的である。そこにいひやうもない美しい情景が描き出されるのである。謡曲には、母性愛を主題とした曲が多いやうに、孝の德を讃へた曲が多い。「熊野」には、遠く離れた老母の病を案じつゝ、心ならずも花見の供をする、か弱い女性の心情を寫して、

河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む。觀音も同座あり、闡提救世の方便あらたに、たちちねを守り給へや。げにや守りの末すぐに、賴む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ。六道の辻とかや。げに恐ろしやこの道は、冥途に通ふなるものを、心ぼそ鳥部山、煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、北斗の星の曇りなき、御法の花も開くなる、經書堂はこれかとよ。そのたちちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、春の隙行く駒の道、はや程もなくこれぞこの、車宿り、馬留め、こゝより花車、おりゐの衣播磨潟、飾磨の徒歩路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

その哀情に感じては、さすが我意一片の平宗盛も歸國を許すと脚色してゐる。また「谷行」には、年少の松若が「身は難行の道に出でゝ、母の現世を祈らん」と、師僧に從つて峯入を志すのであるが、習はぬ旅の疲れに風心地とな

り、峯入の大法に本づき、谷行といつて、生きながら谷底に陥れられたが、同行の山伏一同がその心中を憐んで祈願すると、

伎樂鬼神は飛び來り、伎樂鬼神は飛び來つて、行者（役優婆塞）のお前に跪いて、頭を傾け仰せを受けて、谷行に飛びかけつて、上に蓋へる土木磐石、押し倒し取り拂つて、上なる土をばやはらやはらと靜かに返して、かの小童を恙もなく抱き上げ、行者のお前に參らすれば、行者は喜悅の色をなし、慈悲の御手に髮を撫で、善哉善哉孝行切なる心を感ずるぞとて、歸らせ給へば伎樂も共に、御先を拂つてさかしき道を、分けつくぐりつ登るや高間の、雲霧傳ふや葛城の、人の目にこそかからざれども、まことは渡せる岩橋を大峯かけて遙々と、虛空を渡つて失せにけり。

と、孝行の心力によつて蘇生すると脚色してゐる。その外、かの著名な「養老」の傳說を神事物に脚色してゐるのは勿論のこと、「三井寺」には、孝行の威德によつて、「親子の契り盡きもせず、富貴の家」となつたと結び、「猩々」「大瓶猩々」には、「親に孝あるにより、次第次第に富貴の家」となつた上に、猩々から「酌めども盡きず、飲めどもかはらぬ」靈酒を與へられたと傳へてゐる。なほ又、謡曲作者は武士的な孝行の一手段として、仇討を稱揚してゐる。卽ち「放下僧」に、父牧野左衞門を利根信俊に討たれた遺子小次郎兄弟の會話として、

ツレ（小次郎）「親の敵を討たぬ者は不孝の由申し候。

シテ（兄禪僧）「さて親の敵を討つて孝に供はりたる事の候か。

ツレ「なかなかの事、唐土の事にやありけん、母を惡虎にとられ、その敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出でて狙ふ。ある夕暮に、尾上の松の木隱れに、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひ、番へる矢なればよつぴいて放つ。この失卽ち巖に立ち、忽ち血流れけるとなり。これも孝の心深き

により、堅き石にも矢の立つと申し候へば、唯思しめし御立ち候へ。

シテ「これは面白き事を引いて承り候ものかな。この上は諸共に思ひ立たうずるにて候。

ツレ「然るべく候。

かくて、兄弟は仇討が孝の道であることを確認し、放下・放下僧に身をやつして敵に近づき、やがて本望を遂げ、「孝行深き故に名を末代に留め」るのである。「望月」にも、父を討たれ所領を奪はれた、安田莊司友治の遺子花若が母とともに海浪十三年の後、舊臣小澤刑部友房の助けを得て敵を討つて、本領に立ち歸り子孫に傳へて、今の世に隱れもない弓矢の名を擧げたと述べてゐる。

まして、かの有名な曾我兄弟の仇討は、その一生を記した曾我物語と同樣、兄弟の幼時、敵工藤祐經の進言によつて危く由比濱で殺されようとした「切兼曾我」から、本望を達する「夜討曾我」「十番斬」乃至その後日譚の「禪師曾我」「伏木曾我」等に至るまで、十幾曲に亙つて、詳しくその德をたゝへてゐるのである。

孝は德の本である。百般の善行は孝の道から次第に擴大して行く。謡曲では隨所に仁義禮智信五常の道を說いてゐるが（「內外詣」「俊成忠度」「經政」「天鼓」「鳥追船」等）、わけても兄弟子友の情を詳かに描いた曲に「春榮」がある。增尾太郎種直は敵に捕はれた弟春榮の身代りにならうと思つて、その預り人の許へ來る。しかし春榮は兄の心を察して兄弟の名乘をせず、家人と稱して去らしめようとする。

シテ（種直）「いかに春榮、何とて某をば家人とは申すぞ。さても今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢を拔かんとて少し傍に引き退き候隙に、御身は深入りして生捕られたり。その際の先途をも見屆けざれば、家人といふこと弟ながらも恥かしうこそ候へさりながら、一所に誅せられん

爲に、これまで遙々來りたるに、何とてさやうには申すぞ。

子方（春榮）「いかに汝は三世の好みを思ひ、これまで遙々來りたる志、返す返すもやさしけれさりながら、汝は古里に歸り母御に申すべきやうは、春榮こそ誅せられ候へ、逆さまなる御弔ひこそ預かり候べけれと、よくよく申し候へ。

シテ「猶も家人と申すか。深山木のその梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり。何と家人とくだすとも、終には隱れよもあらじ。

子方「時を得て早くも育つ夏木立、その木をそれと見るべきか。はやとく歸れと叱りけり。

シテ「山皆染むる梢にも、松は變らぬ習ひぞかし。

子方「一千年の色とても、雪には暫し隱るるなり。

シテ「これを物に喩ふれば、殷のやうかは父を討ち、

子方「秦のかくいは師匠をうつ。

シテ「今の增尾の春榮は、

子方「現在の兄を家人といふ。

シテ「これは逆罪なるべきに、

子方「眞は深き孝行なり。

シテ「いやとにかくに命を捨つるまで、種直これにて腹切らん。や、刀は參らせつ。御芳志に刀を賜はり候へ。

子方「なうなう暫くこはいかに。

地「命を助け申さんとてこそ家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか赦させ給へ、兄御前。

かくて、兄弟は最後まで互の身を思うて離れないのであるが、折よくも鎌倉から赦免使が來て、春榮の罪を免されたので、預り入高橋權頭はこれを養子に

申しうけ、祝言の宴を催した後、「いづれもいづれも睦ましく、親子兄弟榮ふる事も、これ孝行を守り給ふ、三島の宮の御利生と伏し拜み、親子兄弟さも睦ましくうち連れて、鎌倉へ」參つたといつてゐるのである。

九　謡曲の主從思想

謡曲は尊皇愛國を大本として、幕府を無視し、武士の暴力を擯斥してゐるが、しかし、武士の間に結ばれる主從關係の美しい情誼は、もとよりこれを推奬してゐるのである。「安宅」に、

シテ（辨慶）「いかに申し上げ候。さても唯今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働きを仕り候事、これと申すに君の御運、盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にもあたらせ給ふかと思へば、いよいよあさましうこそ候へ。

子方（義經）「さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、さても唯今の機轉更に凡慮よりなす業にあらず、唯天の御加護とこそ思へ。關の者どもわれを怪しめ、生涯限りありつる處に、兎角の是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さんざんに打つてわれを助くる、これ辨慶が謀にあらず八幡の、

地「御託宣かと思へば忝くぞ覺ゆる。

地「それ世は末世に及ぶといへども、日月は未だ地に墜ち給はず、假令いかなる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰にあたらぬことやあるべき。

子方「げにや現在の果を見て過去未來を知るといふ事、

地「今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十日の今日の難を遁れつるこそ不思議なれ。

一旦契約を結んだ主從は相互扶助して、最後まで苦樂を俱にする。武士の習

ひとて、屢〻死生の間を往來しなければならない。思へば不思議な宿緣である。親子の間は恩愛の緣に繫がれて、離れることがない。夫婦の間も愛に結ばれて、相別れることが少ない。しかし、主從は一旦の契約に過ぎない。まことに離れ易い、壞れ易い關係である。しかも、その主の爲に生命を投げ棄てる、また投げ棄てなければならない。この不思議な因緣を說いたのが、主從三世の思想である。親子は一世、夫婦は二世、しかし主從は三世の宿緣であるから、離れることが出來ない。現在一世の生命などは問題にならなくなるのである。かう考へ及んだ時に、主從は何の不安もなく、堅く結ばれるのである。この考へ方が謡曲に於て初めて明示せらること〻なつた。「巴」に「主從三世の契り」「望月」に「三世の契りの主從」「朝長」に「主從の御契りこれも三世の御値遇」「高野物狂」「仲光」に「三世の主君」「春榮」に「三世の好み」「攝待」に「三世の御恩」などといつてゐるのが、それである。勿論、この爲に親子愛を輕く見ようとするのではない。「熊野」に「さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし」といつて、一世なるの故を以て、現世に於ける孝養を勸め、「春榮」には更に一歩を進めて、「げにや生きとし生けるもの、いづれか父母をかなしまざる。必ず一世に限るべからず、代々以て父母の數々なり」と、積極的に出て、一世思想の否定的態度をさへとつてゐるのである。事實、親子關係と主從關係とは、やゝもすれば、矛盾衝突する恐れがある。これを解決するものは、親と子とが諸共に、主の爲を思ふことである。子が主の爲に盡くすのを見て、親が喜び、進んではこれを助長する。ここに忠と孝とが一致して、間隙を殘さないこと〻なるのである。「攝待」に、佐藤繼信・忠信の母老尼が、その主義經を迎へて、「親子よりも主從は、深き契りの中なれば、さこそわが君もあはれと思し召すらめ」といひ、繼信の遺子鶴若が「馬に鞍置き弓靫參らせよ、君の御供申さうずるに」といつてゐるのが、

それである。更に切實な、沈痛な例が「仲光」に描かれてゐる。多田滿仲はわが子美女丸が、父の命に違つて、學問に心を入れず明暮武勇を嗜むのを見て、憤りの餘り、家臣藤原仲光に美女を斬れと命ずる。

シテ（仲光）「あはれ某御年の程にて候はば、御命に代り候はんずるものを、惜しからぬ命も事によりて、心に任せぬ口惜しさは候。

幸壽（仲光の子）「いかに父上、唯今の御言葉こそ幸壽が耳に留まりて候へ。はや自らが首をとり、美女御前と仰せ候ひて、主君の御目にかけられ候へ。

シテ「何と申すぞ。美女御前の御命に代らうずると申すか。さすが仲光が子にて候。げにげに汝が首をとり薄衣に包み、夜紛れに遠々と御目にかくるならば、さすが親子の御事なれば、よもさだかには御覽じ候まじ。さらば御命に代り候へ。時刻移りて叫ふまじと、太刀おつ取つて仲光は、わが子の後に立ち寄れば、

美女「美女はあまりの悲しさに、仲光が袂にすがりつゝ、たとひ幸壽を失ふとも、共に自害に及ぶべし。と、泣き悲しみて制すれば、

シテ「なうお主の命に代ること、弓矢取る身の習ひなり。

美女「悲しやな互に爭ふ命の際、

幸壽「幸壽も進み、

美女「美女も立ち寄る、

シテ「こなたは思ひ子、

美女「中にてなかなか、

シテ「仲光が、

地「身はこれほどに惜しからじ。何とかせましとやあらんと、猛き心にも、弱り果てたる氣色かな。

美女「親にだに、惜しまれぬ身を何と唯、かく思ふらんなかなかに、情の

つらさ如何ならん。

幸壽「情は人の爲ならじ。今この際の御命に、代り申さずは、弓矢の家の名ぞ惜しき。

地「かなた此方も幼き、御身にだにも理の、或はお主子は惜しし、主君をばいかで手にかけんと、心弱しや白眞弓、弓手にあるはわが子ぞと、思ひ切りつつ親心の、闇打に現なき、わが子を夢となしにけり。

と、わが子幸壽丸を幼君の身代りに殺してゐるのである。

十　謠曲の藝術思想

前項に擧げた「仲光」に於て、武家の多田滿仲が慣つてわが子を殺さうとしたのは、學問をば心に入れず、明暮武勇を嗜んだ爲である。滿仲が美女丸を寺から呼び寄せ、試みに御經を讀誦させようとするが、美女丸は一字も讀めない。げにげに滿仲が子なれば、一寺の賞翫隙を得ず、御經讀まぬは理なれ。さて歌は。詠み得ず候。管絃は。問へどもいはぬ口なしの、こは誰が爲なれば、父がさしもにいひし事に跡をつけぬ庭の雪、人に見せんも何某が、子といふかひもなかるべし。

滿仲はわが子が和歌・管絃を學ばなかつた事を、世間に對しても恥かしく思つて、痛く慣つたのである。

謠曲作者は勿論文武の二道を尙んでゐる。「忠度」に、「中にもこの忠度は、文武二道を受け給ひて、世上に眼高し」といひ、「俊成忠度」にも、

痛はしや忠度は、破戒無慚の罪を恐れ、仁義禮智信、五つの道も正しくて、歌道の達者たり。弓矢に名を揚げ給へば、文武二道の忠度の、船を得て彼の岸の、臺に到り給へや。

といひ、「賴政」にも「文武に名を得し人」といひ、「木曾」にも「文武の達者」

といひ、前に擧げた「放生川」にも「文武二つの道廣く」といつてゐる。しかし、その好む所は、鬪爭的な武技ではなく、古典的な藝術趣味であつたのである。「經政」にも、

　さればかの經政は、末だ若年の昔より、外には仁義禮智信の、五常を守りつつ、內にはまた花鳥風月、詩歌管絃を專らとし、春秋を松陰の、草の露水のあはれ世の、心に洩るる花もなし。

といつてゐる。男も女も、文學技藝に勝れたものが尙ばれてゐるのである。謠曲に描かれた多くの女性は、戀愛の妄執によつて、地獄の苦患に惱んでゐるが、文藝の達人だけは墮獄の苦を嘗めないばかりか、佛菩薩として現はれるのである。

　和泉式部は多情多感、戀愛に惱んだ人であつたが、一面和歌の名人であつたが故に、謠曲では、「東北」に、「門の外法(のり)の車の音聞けば、われも火宅を出でにけるかな」と詠んで、その歌の心の如くに火宅をば出で、「詠み置く歌舞の菩薩と」なつたといひ、「誓願寺」にも、

　われも假なる夢の世に、和泉式部といはれし身の、佛果を得るや極樂の、歌舞の菩薩となりたるなり。二十五の、菩薩聖衆のみのりには、紫雲たなびく夕日影、常の燈火影淸く、さながらここぞ極樂世界に、生まれけるかとありがたさよ。

といつてゐる。殊に和歌の聖といはれた在原業平の如きは、「花に影じて衆生濟度の姿を現し」たものであり(小鹽)、「歌舞の菩薩の假に衆生の業平の、本地寂光の都を出でて、普く衆生利生の道に遙々來」たもので(杜若)、

　業平は極樂の歌舞の菩薩の化身なれば、詠み置く和歌の言の葉までも、皆法身說法の妙文なれば、草木までも露の惠みの、佛果の緣を弔ふなり。……「杜若」

と、一度彼の詠歌の題材となれば、その題材となつた草木までが、佛果を得ると見てゐるのである。必ずしも業平に限らない、第五項に述べたやうに、歌人の吟詠を受ければ、櫻の精も藤の精も楓の精も現れ出て、舞を奏するのである。草木ばかりでなく、住吉明神も西行の詠歌を聞かん爲に出現せられ(雨月)、「蟻通」の明神も貫之の詠歌によつて、怒りを和らげて神樂を奏されるのである。

和歌の道ならば神も許しおはしませ、貴からずして、高位に交はるといふ事、唯和歌の德とかや。……「鸚鵡小町」

凡そ歌には六義あり。これ六道の巷に定め置いて、六つの色を見するなり。されば和歌のことわざは、神代よりも始まり、今人倫に遍し、誰かこれを褒めざらん。……「蟻通」

陰陽二つの道を守る。その句を分つて五體とす。木火土金水なり。上下は卽ち天地人の三才はこれ詠吟なるべし。……「雨月」

妙なりや敷島の、道ある御代の翫び、然れば三十一文字の、神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れ給へば、君も安全に萬民時を樂しみて、都鄙圓滿の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬歳の響は、のどけかりけり。……「志賀」

かうした、和歌に對する無上の讃仰は、古今集序以來久しくく涵養せられて來たもので、殊に平安末期から宗教的信仰となつて來たものであるから、謠曲はこれを繼承し、更にこれを强調したのに外ならないが、他の文藝、例へば物語などに對しては、從來著しい誤解のあつたのを、謠曲作者は明確に是正してゐるのである。從來の考へ方によれば、物語は虛構の小說で、從つてその作者は破戒の罪を免れない。だから、かの世界に誇るべき大文藝を創作した紫式部と雖も、この厄を免れ得ないと信じたのである。卽ち平康頼は寶物集に、

まぢかく紫式部が虛言を以て源氏物語を作りたる罪によりて、地獄に落ち

て苦患忍び難き故に、早く源氏物語を破りすてて、一日經書きて弔ふべし
と、人の夢に見えたりけり。

といひ、藤原信實の今物語にも、

空言をのみ多くしあつめて、人の心を或はす故に、地獄に落ちて苦を受く
る事いと堪へ難し。源氏の物語の名を具して、なもあみだ佛といふを、卷
毎に人々によませて、わが苦しみを弔ひ給へといひければ云々。

といつてゐる。しかし、文學意義、藝術價値の上に於て、和歌と物語との間に、何等の差別上下のあらう筈はない。謠曲では、「源氏供養」に、

よくよく物を案ずるに、紫式部と申すは、かの石山の觀世音、假にこの世
に現れて、かかる源氏の物語、これも思へば夢の世と、人に知らせん御方
便、げにありがたき誓ひかな。

と讃仰し、物語の主人公光源氏についても、「須磨源氏」に、

光源氏の御住家、昔は須磨、今は都率の天に住み給へば、月宮の影に天降
り、この海に影向あるべし。

といひ、やがて源氏の大將が「假に人間と現じ」、「ここもとはわが住家、なほ
も多生を助けんと、都率天より二度ここに天降る」といつて、歌聖在原業平に
對すると全く同樣な尊敬を捧げてゐるのである。

文學と相竝んで、音樂についてもその功力をたゝへ、例へば「咸陽宮」に
は、花陽夫人が琴の祕曲を奏して、刺客は秦舞陽・荆軻の危害から始皇帝を救
つたといひ、「絃上」には、藤原師長の琵琶に對する執心に感じて、八大龍王
が村上天皇に隨つて海上に浮かび出で、管絃の役々を勤め、祕曲を授けたと描
いてゐるのである。

十一　謠曲の宗教思想

最後に、謡曲に最も著しい影響を與へたと見られてゐる佛教思想について概觀すれば、大部分の謡曲が佛教思想によつて構想着色せられてゐるのである。卽ち文學技藝の達人は、もともと佛菩薩の化現であるか、或はその達藝の果報によつて佛菩薩に到るものと見て居り、多くの武士は鬪諍の罪によつて修羅道に陷り、旅僧の回向によつて救はれると着色し、多くの女性は邪婬戒を犯して地獄道に沈むが、僧侶の讀經によつて成佛すると結び、花鳥蟲魚も僧の回向を受ければ、「草木國土悉皆成佛」の理に從つて得脫の身となると描いてゐるのである。當時廣く行はれた諸宗派について見れば、日蓮の宗義に本づいて、法華經の妙德を說いたものには、「鵜飼」「現在七面」「身延」などがあつて、「鵜飼」には、

シテ「法華は利益深き故、魔道に沈む群類を救はん爲に來りたり。

地「げにありがたき誓ひかな。妙の一字はさて如何に。

シテ「それは褒美の詞にて、妙なる法と說かれたり。

地「經とはなどや名づくらん。

シテ「それ聖教の都名にて、

地「二つもなく、

シテ「三つもなく、

地「唯一乘の德によりて、奈落に沈み果てて浮かみ難き惡人の、佛果を得ん事はこの經の力ならずや。

といひ、「現在七面」には、

抑も法華經といつぱ、釋尊久遠劫のその昔、初成道の時悟り得給ひし、妙法華經なり。然るに華嚴の朝より、般若の夕に至るまで、抑止在懷し給ひて、種々の方便機に隨ひ、終に一乘を說き給はねば、十界差別まちまちなり。さる程に女人は、外面は菩薩に似て、內心は夜叉の如しと嫌はれし、

その言の葉はもろもろの、經の内にし陸奥の、安達が原の黑塚や、荒れたる宿のうれたきに、假にも鬼のすたくなると、詠みしも女の事とかや。かかる憂き身の浮かまん事、いつの時をか松山や、袖に涙の波越えて、作り重ねし罪科を、悔の八千度身をかこち、佛の御法の言の葉さへ、恨めしとのみ歎きけり。然るにこの法華經は、佛七十餘歳にて、始めて說かせ給ひしに、そよや一味の法の雨、等しく濺ぐ潤ひに、敗種の二乘闡提も、皆々同じ悟りを得、殊に文殊の教へにて、龍女は須臾に法を得て、この世ながらの身を捨てず、本の覺りの古里に、立ち歸る有樣や、錦の袂なるらん。

と述べて、龍女成佛を實證し、「身延」にも同工の脚色をして、

紫雲たなびき光さし、千草にすだく蟲の音までも、妙法蓮華のとなへかな。げにありがたき法の道、末暗からぬ燈火の、永き闇路を照らしつつ、三つの袴も悉く、得脫成佛の御法なり。げにありがたや賴もしや。

とたゝへて居り、法然・一遍等の教義に從つて、彌陀念佛の功力を說いたものには、「誓願寺」に、一遍上人自身をワキとして、その教義を述べて、

何事も皆うち捨てて、南無阿彌陀佛と稱ふれば、佛もわれもなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり、至誠心深心廻向、發願の鐘の聲、耳に染みてありがたや、まことに妙なるこの教へ、十聲一聲數分かで、悟りをも迷ひをも迎へ給ふぞありがたき。

といひ、「當麻」にも、

末の世に迷ふわれ等が爲なれや。說き殘す御法はこれぞ一聲の、彌陀の教へを賴まずは、末の法萬年々經るまでに、餘經の法はよもあらじ。たまたまこの生に浮かまずは、又いつの世を松の戸の、明くれば出でて暮るるまで、法の場に交るなり。

といつて、曼荼羅緣起を委しく述べて居り、「柏崎」にも、夫に別れ子の行方

を失うた狂女が、善光寺の寺僧から「いかに狂女、御堂の内陣へは叶ふまじきぞ、急いで出で候へ」と斥けられると、「極重悪人無他方便、唯稱彌陀得生極樂とこそ見えたれ」と答へ、寺僧が驚いて「これは不思議の物狂かな、そもさやうの事をば誰か教へけるぞ」と問へば、

教へはもとより彌陀如來の、御誓ひにてましまさずや。唯心の淨土と聞く時は、この善光寺の如來堂の、內陣こそは極樂の、九品上生の臺なるに、女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば、如來の仰せありけるか。よの人々は何ともいへ、聲こそ知るべ南無阿彌陀佛。賴もしや賴もしや、釋迦は遣り、彌陀は導く一筋に、ここを去ること遠からず、これぞ西方極樂の、上品上生の內陣にいざや參らん。光明遍照十方の、誓ひぞしるきこの寺の、常の燈火影賴む、夜念佛申せ人々よ、夜念佛いざや申さん。

と一向念佛を稱へ、「百萬」の狂女も、嵯峨の大念佛に詣でて、

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。彌陀賴む人は雨夜の月なれや、雲晴れねども西へ行く。阿彌陀佛やなまうだと、誰かは賴まざる誰か賴まざるべき。

と、亂れ心ながらも彌陀如來の御手に縋つてゐるのである。殊に當時の武士階級に最も勢力のあつた禪宗の教旨については、「卒都婆小町」に

提婆が惡も觀音の慈悲、槃特が愚癡も文殊の智慧、惡といふも善なり、煩惱といふも菩提なり、菩提もと植木にあらず、明鏡また臺になし。げに本來一物なき時は、佛も衆生も隔てなし。もとより愚癡の凡夫を、救はん爲の方便の、深き誓ひの願なれば、逆緣なりと浮かむべし。

といひ、「放下僧」に、

ワキ「さて放下僧はいづれの祖師御禪法を御傳へ候ぞ。面々の宗體が承りたく候。

シテ「われらが宗體と申すは、教外別傳にして、いふもいはれず說くも說

かれず、言句に出だせば教に落ち、文字を立つれば宗體に背く。ただ一乘の飜る、風の行方を御覽ぜよ。

ワキ「げにげに面白う候。さて坐禪の公案何と心得候べき。

ツレ「入つては幽玄の底に動じ、出でては三昧の門に遊ぶ。

ワキ「自身自佛はさていかに。

シテ「白雪深き所金龍躍る。

ワキ「生死に住せば、

シテ「輪廻の苦。

ワキ「生死を離れば、

シテ「斷見の科。

ワキ「さて向上の一路は如何に。

ツレ「切つて三斷となす。

と說き、「山姥」にも、

それ山といつぱ、塵土より起つて、天雲かかる千丈の峰。海は苔の露より滴りて、波濤を疊む萬水たり。一洞空しき谷の聲、梢に響く山彥の、無聲音を聞くたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと、望みしもげにかくやらん。殊にわが住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し。前には海水滾々として、月眞如の光をかかげ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深うして、鳥驚かずともいひつべし。遠近のたづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼ぶ鳥の、聲凄きをりをりに、伐木丁々として、山更に幽かなり。法性峯聳えては、上求菩提を現し、無明谷深き粧ひは、下化衆生を表して金輪際に及べり。抑も山姥は、生所も知らず宿もなし。ただ雲水を便りにて、到らぬ山の奥もなし。然れば人間にあらずとて、隔つる雲の身を變へ、假に自性を變化し

て、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色卽是空そのままに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は綠花は紅の色に。

などといつて、可なり深くその教旨に立ち入つてゐるのである。なほこの外に、それ無常といつぱ、目の前なれども形もなし。一生夢の如し、誰あつて百年を送る、槿花一日唯同じ。……「源氏供養」

朝に紅顏あつて世路に樂しむといへども、夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ。有爲の有樣、無常の眞、誰か生死の理を論ぜざる。いつを限る習ひぞや。老少といつぱ分別なく、變るを以て期とせり、誰か必滅を期さざらん。

……「檜垣」

昨日も徒らに過ぎ、今日も空しく暮れなんとす。無常の虎の聲肝に銘じ、雪山の鳥啼いて思ひを傷ましむ。一生は唯夢の如し、誰か百年の齡を期せん。萬事は皆空し、いづれか常住の思ひをなさん。命は水上の泡、風に隨つてえめぐるが如し。魂は籠中の鳥の、開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは二度見えず、去る者は重ねて來らず、須臾に生滅し、刹那に離散す。恨めしきかなや、釋迦大士の慇懃の教を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の詞を聞く。名利身を扶くれども、未だ北邙の煙を免れず、恩愛心を惱ませども、誰か黃泉の責に隨はざる。これが爲に馳走す、所得いくばくの利ぞや、これによつて追求す、所作多罪なり。暫く目を塞いで往事を思へば、舊遊皆亡す、指を折つて故人を數ふれば、親疎多くかくれぬ。時移り事去つて、今なんぞ渺茫たらんや、人留まりわれ往く、誰か又常ならん。

……「歌占」

などと、屢〻人生の無常を說いてゐるが、しかしそれは、樂しい人生を享受する期間の餘りに短いことを歎くのであつて、現世厭惡來世欣求の無常思想から

出てゐると認められ得るものは、極めて少ない。否、謠曲作者は佛教の厭世思想とは反對に、我國古來の現世讃美思想に本づいて、これを人生幸福增長の方便として、所願成就の祈禱敎として信じたのである。既にこの世を立ち去つた故人に對しては、もはや已むを得ないから、極樂往生得脫成佛を祈願するが、現世に生存する人々に對しては、佛菩薩は神と同じやうに、利益を與へ給ふものと解して、觀音菩薩を信じたるが故に、鬼神を亡ぼすことが出來（田村）、親子の再會を遂げ（三井寺）、又阿彌陀如來を信じたが故に、親子の對面を得た（「柏崎」「土車」「百萬」）と說くのである。

由來、わが國は神國であつて、「神や佛とは唯これ水波の隔てにて、神佛一如」（道明寺）であり、「佛も神も同一體」（大佛供養）であり、「佛と現じ神となり世を守り」給ふ（巴）のであるから、佛法の流布は王法の興隆に伴ひ」（「大社」「鱗形」「鷺」）、從つて、佛菩薩の働きは、第三項神國思想の條に述べた神力と變りがないのである。「江島」に、

シテ「われ昔は、深澤の池に住んで、五頭龍王と現れ、今は國土の守護神となる瀧の口の明神なり。

地「聞きしに變らぬ因位の形、聞きしに變らぬ因位の形、

シテ「頭は五頭龍、

地「胡髯の腮、眼に白日をつなぬき、その身は黑雲をまつへり。苔むす松も野べ伏す巖の、峨々たる上にぞ現れたる。〔働〕

シテ「神佛水波の隔てなり。

地「神佛水波の隔てなれば、同一體の、利益の樣々の辨才天部は威光を現し、明神もろともに百千劫の、齡を守らんと約諾堅き、岩間を傳ひ、凉み取るてふ綠の海に、飛行し給へば、磯打つ波も龍の口の、明神忽ち威を揮ひ、雲を吹き嵐に輝く眼の光は、天地に充ち滿てり。その時天部は童子を

伴ひ、紫雲の上に現れ給へば、明神立ち來る黑雲に乘じ、光を放つて島根を廻り、廻り廻るや暫しが程は、とりどり姿を雲中に現し、とりどり姿を雲中に現すも、げにありがたき影向かな。

また「岩船」に、

シテ「われはこれ、下界に住んで神を敬ひ君を守る、秋津島根の龍神なり。

地「或は神代の佳例をうつし、

シテ「又は治まる御代に出でて、

地「寶の御船を守護し奉り、

シテ「勅も重しや勅も重しやこの岩船、

地「寶を寄する波の鼓、拍子を揃へてえいやえいや。

シテ「引けや岩船、

地「天の探女は、

シテ「波の腰鼓、

地「ていとうの拍子を、打つなりやさざら波、經めぐりめぐりて、住吉の松の風、吹きよせよえいさ、えいさらえいさと、おすや唐艪の、おすや唐艪の、潮の滿ちくる波に浮かんで、八大龍王は、海上に飛行し、御船の綱手を手に繰りからまき、潮に引かれ波に乘つて、長居もめでたき住吉の岸に、寶の御船を着け納め、數も數萬の捧げ物、運び出だすや意の如く、金銀珠玉は降り滿ちて、山の如く津守の浦に、君を守りの、神は千代まで、榮うる御代とぞなりにける。

かくして、神も佛も、わが大君の彌榮を壽ぎ奉り、わが神國の繁榮を守護し、わが萬民の利益を增長し給ふといふのが、すべての謠曲に亙つた、一貫した思想なのである。

1490
60

謠曲と日本精神　終

寄贈
衆議院
15.11.30
圖書館

昭和十五年七月六日印刷
昭和十五年七月八日發行

教學局　編纂
內閣印刷局　印刷發行

販賣所　內閣印刷局發行課
東京市麴町區大手町
電話(23)三五一—三五九
振替東京一九〇〇〇
全國各地官報販賣所
全國各地主要書店

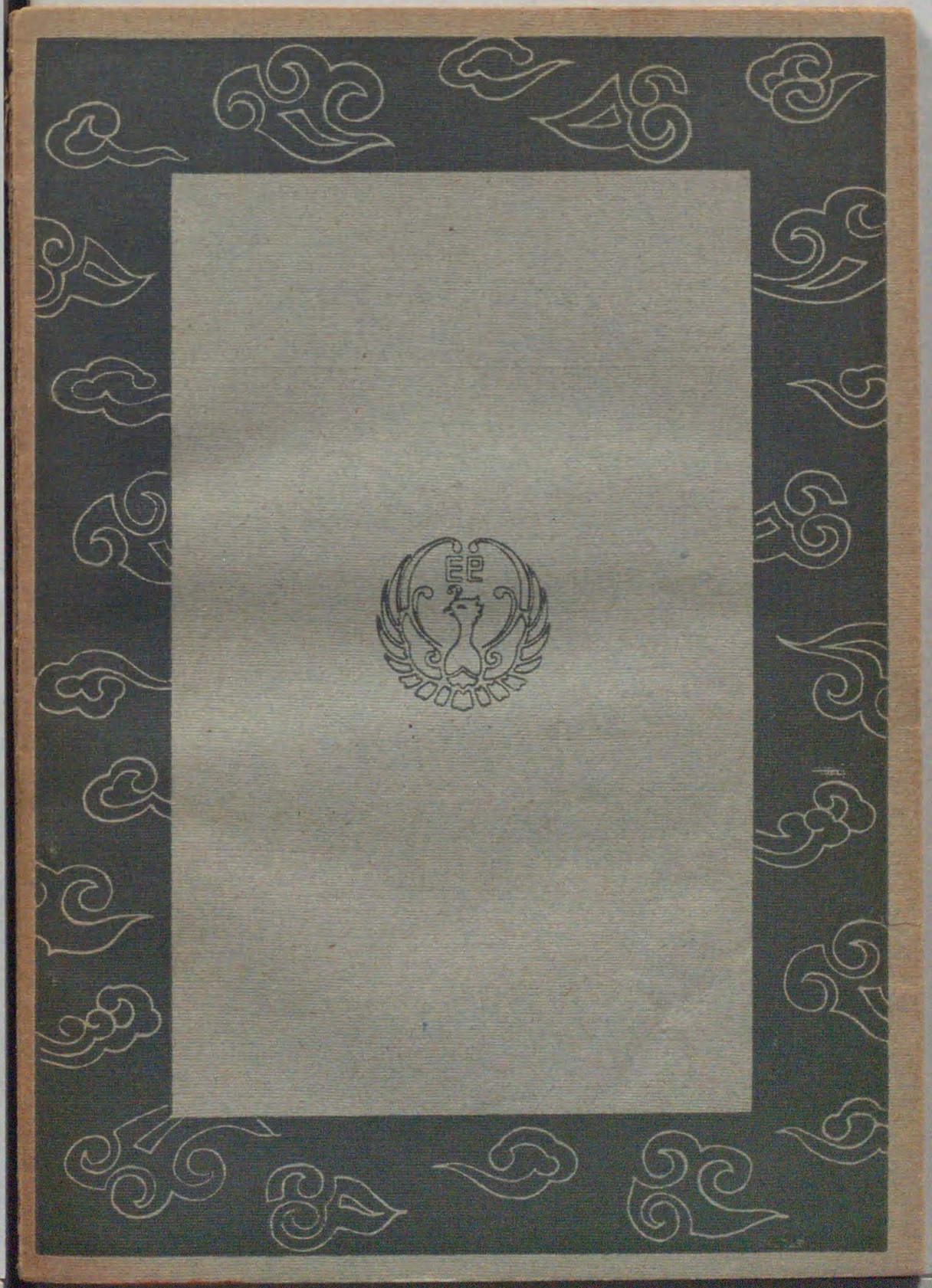
定價　二十五錢

日本精神叢書目錄

番號	書名	執筆者	定價
一、	歷代の詔勅	河野省三	二五
二、	古事記と肇國の精神	植木直一郎	二〇
三、	聖德太子と日本文化	花山信勝	二〇
四、	神樂・神歌	志田延義	二五
五、	十訓抄と道德思想	藤岡繼平	二〇
六、	親鸞と日本佛教	小野正康	二五
七、	日本精神歌集	久松潛一	二〇
八、	翁問答と日本教育論	海後宗臣	二〇
九、	心學精粹	石川謙	二五
一〇、	吉田松陰の留魂錄	紀平正美	二五
一一、	萬葉集と忠君愛國	武田祐吉	二〇
一二、	謠曲と日本精神	佐成謙太郎	二五
一三、	二宮翁夜話の精神	佐々井信太郎	二五
一四、	庭園と日本精神	龍居松之助	二五

日本精神叢書目錄

一五、	賴山陽と日本精神	鹽谷溫	二〇
一六、	祝詞と國民精神	武田祐吉	二〇
一七、	神道大意	河野省三	二〇
一八、	世阿彌と其の藝術思想	野上豐一郎	二五
一九、	傳敎・弘法と日本文化	金子大榮	二〇
二〇、	山鹿素行の配所殘筆	紀平正美	二〇
二一、	徒然草と人生觀	阪口玄章	二五
二二、	中臣祓と民族精神	河野省三	二〇
二三、	萬葉集と國民性	武田祐吉	二五
二四、	宮本武藏 五輪書と劍道の精神	岡田恒輔	二〇
二五、	聖德太子の十七條憲法	白井成允	二〇
二六、	戰記物語と日本精神	高木武	二五
二七、	爐邊閑想	奧田正造	一五
二八、	道元と日本の禪	紀平正美	二〇
二九、	芭蕉と俳諧の精神	志田義秀	二五

日本精神叢書目錄

三〇、風土記と古代日本　次田潤・二五
三一、日蓮と日本の佛教　小林一郎・二五
三二、大佛師運慶　丸尾彰三郎・二五
三三、萬葉精神　鴻巣盛廣・二五
三四、漢詩と日本精神　鹽谷溫・二五
三五、日本書紀と日本精神　武田祐吉・二五
三六、菅家遺誡―和魂漢才―　加藤仁平・二五
三七、奈良時代に於ける國家と佛教　辻善之助・二〇
三八、太平記と武士道　高木武・二〇
三九、古語拾遺と神國日本精神　植木直一郎・二五
四〇、長谷川昭道の皇道述義　飯島忠夫・二五
四一、太神宮參詣記と敬神尊皇　加藤玄智・二五
四二、幕末勤皇歌人集　志田延義・二五
四三、國學と玉だすき　久松潛一・二〇
四四、三經義疏と日本佛教　金子大榮・二五
四五、直毘靈―神の道とやまと心―　安藤正次・二〇
四六、創學校啓―國學の建設―　竹岡勝也・二〇